俳諧一串抄

坤

俳諧一串抄巻之下

○題詠の部

さるはいつる如く。詩歌の詠も物変を述るこの実用なるべく。物変ハ季節の詠物なり。詠物の不ゝ合ゆゑ序を乱し重べきなり。花は詠物の梅柳を賞詠せる為の句とせハ。花蕾一倫は落るべん。花しゝく次第入てその境界ハ変ぜる種蕾或ハ若新木の影等能く。そ具合試こ実用の倫ゝとなるべきなり。

故ふ今影響をさ紀ふ、かくのごと

一ともせる一度つまるまつかう水

古畑や蕎は花ゆく男とも

さんりやくこたふ、蕎うつるなり

蕎ハりのいみの義なるをさ紀ふいてるがごとし。

これ一業一度の祝日なるを示しるなり。古畑

のもも古典のれなるを喩しるし。米この白ハ

白ひなる紀撒菜なるのしるし彩素の色ふ貴するを。

宮中の食物りるを喩しるし。

始るさしの梅や難波の二年蔵

これ第二ともせづりるるく古郷へ帰る時の句

なるべし。難波ハ二年蔵といさん料なり。これ

和爾が難波の大皇とくるを紀ふ。冬なり

今を春べ」と二ともせふうけたる辞りるいてるなり。

古郷ハなふをを第るるるく。大坂を指ハ帰ひ。

梅うゑるのりくはのはるる紀ふ

のりと。ぱくと共ふ信徒るるてなのづのるる後素

りりのりとハぱんのるるる。梅花の日光にさを

たれ。かんのうと蓋うを変生するを緩せいるの句
なり。日新のこの門と出るとせだ梅を見ずやや
ふうるべし。時ふ俗ふく思ふ激氣俗黄鳥なり。
日光八激氣。梅八黄鳥なり。山路八意盛のある
所ふ儲ふるまこと。

かぞへ来ぬ夏衣くの梅柳

られ初大海の句なるべし。長閑ふ月と波ふ
樓閣なども。梅柳なり。形実しふるものを。
梅柳の句なりとせば。てろの若く所なり。

素もやくけしきこてのふ月と梅

光素色の句。月梅ふ俗の雜なれば。道の秋こそ
とともべうべし。一句のこと八月のこもちるふらのるる数珠
示せり。ふ俗の二ツ物ちもぐてむちふるを一ツを渝すのく。

梅柳さて若葉流うるかこの那

られ八梅柳の句こ。如八ひもちてよもべし

麦めしみやはたる高う猫の書

られ傾うるる句なり。たりふ屋つるる高ふて
俗るべきを墨しるるべし

鶯ゆりて七日ゐる梅うの部

花咲くて七日鶯なくこゝのとうる

これ二句共に集よりいでたり。初句ハ花ハ七日の句
なるべし。これぞ箱のもの〳〵庵なるべき。次の句を箱
の面なりとする説ハ。初句を鶯うゑるとする
が為なり。鶯一ゑひ下れば花より七日位と雪なれ
ば。霧ハ七日といえん料の序なり。此体裁宗祇乃
郎天の稽古の句ふかなり。次の句を二句とせば
花の縁ハいうふとうせず

むの雲雖ハ上野この浅草この
これも墨ハ句なるべし。花の雲ハ正午花紙
指縛も雖ハ雖ハ午を新なるべ午南端の縁を
面がゝ。おそゝくハ等若雲の上なる日の字
をのゝ張れるゝ。花墨ハ雲ハ等若雲尾午
居なるゝ雲方の雲をなぐめてのゝ。いづくふつく
やらんへ和のゝ。ふ花やちるゝん。なぐせゝるる
るべし。若雲なるの縁を歌枕閑とうるをんを楽天
が為ものりひ出るる

もの陰寒く

られ俳句の姿をなせり。うるはしい句なり。

蕉清て花の姿をぬく夕べ

これ蕉を捨へきものの。姿をぬくなり。清るを

宮あるを却なしたる体裁なり。蕉を抜くを

姿の貴語なり。句のうるハ日ハ脱ふ入れなれど。

もの姿を牧芳しとなり。

木のうるに汁も鶏も抜この形

この汁なるを抜朝抜濃苔などなるをうるる

花を帰してそれをいはぬがよいなり。

鶏なる奴花を入るハ雅が被れさる句

られ花紙貴殿ふ似せるを句なるん。雅とゆる

被を句なるふ好られとなるせハ奴の句となるふ嫌

あり。ゆえ花を貴するゆのより歌も奴もいるが

らふ俗なる雅を風の義とするも俳諧なれば。さやく

ゆる雅を風の義とし。古今集の序なるる

墨を欲の雅判を俗と俗を雅。ゆりの氏

うるを去る。

さしもさやかなるものゆゑに時の桂木
世や人やあるもその智之十里
さしもさやかなるものゆゑに聖人参
この句もあるこの家人を呼るゆゑに病たる
らるるをいとこころるるまく。おのめでるを嗤
ふるこ初句ふかめをいひ蕾しく後年賢
者のそしりを結こと〻かきゆり。次の句ハ
魏の曹操といふ人費蔵う碑をよむ。楊脩小
かるれるる事を道之十里なり。故事ゆり。さ

れど世やハ古年の時代をさし。人やハ人の情をさ
しく此句の智者ハ茅の句ハ喫茶ゆく。共年
さしもきこうをゆげく。おの賞すべきを嗤
こ

花の香も初ゆるし枝の白菜うれ
駿河路や富士橋も茶のゆるひ
山吹や宇治の宿橋のゆるふる
初二句ハ茶ハ句之ハ山吹の句なり
檀や伊勢の名ゆの店さし

この句神宮れきゝ神楽をのちゝせるなり。
神楽興行ハ業書より正二月を常とす。
保生の書とゝなれだ江戸藩中ハ冠婚葬祭ハ
とゝなるをたゞ祭り出せるなり。
ゝを

初蕨まゝこ来る芽法師まで

蕨蕨の句なり。蕨ハ花ゆゝ蕨の穂の赤
まゝぐ来ゝハゆきゝ出るゝきうせるのゝ。
裏のゝ穂ハ枯行ゝ蕨ゝ又きゝるゝとなり。

芽法の字ゝて蕨ゝきを喻ゝゝ。これカ
句ゝと賞するもゝれど。只蕨体裁と名ぶく
ゝ名きゝ。緑ゝ白れちのゝハ海ゝ出せる早苗
等れ句のおゝ。すゝゝとやせゝうふ意味ゆる
をゝそいふめき

夕だちのせゝで夕風やどる小菊ゝ
せきゝのゝ紅ゝゝふゝ
木陰ゝゝ葉揺も涼やかゝきゝ
美州や狼毒ゝ道なゝのゝ

初句の下五は極深しゝる戸閉なるや麻衣
とのべて。生涯のやもめ富州なるを喩せり。
夕の字ふかし。生涯嵐ハ雨場合みよしゝ
おりて。秋のあどを紀を喩せ。一の字ふかし。郭
公ハ人をさ山梔を心をとゝせる。初夏の黄ゆる
を喻しゝり。芳州の句ハ。剛柔を合せの格なり。
かゝ筆とる例を考へ。大江丸和尚の
系の芳州ハ若年も句おきを拾ゝを有る」とた
たもれたまれて。この桃青が早業をハ去りぬとし

笑をせうるなり

蕉の月沖油より出て赤坂や
られ東海道を稀なる十六丁れるはきりく
稲荷を喻し。赤をかけを働せ且流しのや
ふ歎を含めるを

一夢九江ふ横ふふや郭　公
郭公夢横ふふやれうく
あゝきく消りるや雨ひる
沾さしめ二句も集中並ひ出て。芳ハ沾の句

さりに定られし也備りとぞいと悦しかりし。初句ハ名所に掛合せたる江なれど必萬端などに比する名所なるも句意ハ流石の名景も此一景に奪ひとられたる奪ふの字を様たふの一云に含めて。其態ありて孤なし。句の句を賞翫の名なしく。名に貴躰なりけれど。郭公其姿を喩たる物なし。さるまでも名と似るがごとしせども。殊に鶴とし鵜とも也かたるかなくして格も没すべし。且江と名とふ花の

然りて大小有て一の字ハ大の掛合せなり。果の句も其對を擬べし。譬とへバいづれ大相とし。濃緑ヶ竹生嶋ヶ此大物として郭公を喩し之る也。

橋や此川の竪中の郭公

此れ橋の句なり。時鳥れ親と見べうと心。句意郭公を殺まきの義。此の竪中ハ古今集に「いそくの竪中れ清水」とよみし竪中なり。此二ツの種をまきいそくありとむかしを無ふ橋

の本情を喩へしるすなり。郭公の句なり
こゝにて詩中に用ゆ。句意明らかなるべし
也を宿はたゞ雨のやどりやさつきぞ
出句集中春花の部なれども秋の部にも出ぬ。牡丹は句なる
べし。これ翁が常に才情なり。
蓮の秋や岸ぶゝ冷し物
蓮の葉や夕貌てせ〳〵る合羽
初句中の七の字濁音なり。浸の句は春にて
盃会精霊むかへの句なるべし。

日ろる暑く涼や一樹の松の音
られ蓑ふ涼しきを松風を異気なる物〳〵なる
物なり。一本ぐゝわの涼風は異気に奪ふ也。
却て宮風なるなり。天地間ふるゝなる
大暑を喩へしなり。
秋月や六日になるも春の秋よハ妙
移ふの樹の紫蘇もいとゝ星の新
七夕や林を宮なるもの秋
九句を並べ吟ぜるゆ必序故なりとぞ。

之白初八近場る男と迷へ中ちあさうゝぬ
鄭りを添ゝ渡ゝ林の俤きとかけゝ星の
ゆを拾ゝゝ

目あかる時やきづの河ゝ雪

素秋の移り易れを歎ゝる白なり。偖り
豹見病の雪ちの風き強ち思よせ。山路帰を
ゝ素雪の。月も冬ゝ又度を来ゝるとなり。
さて白を仰るか体ゝ用との分ち。体ゝ若りも
せる月ゝもせる。其物の姿ゝを体ゝいひる事

なり。月ゝ雪ゝ物の体なゝ白いひる事なり。
ちなゝ。月ゝ雪ゝ物の体なゝ白いひる事なり。
ちなゝ。月ゝ雪ゝ物の体なゝ白いひる事なり。
ちなゝ。月ゝ雪ゝ物の体なゝ白いひる事なり。
ちなゝ。月ゝ雪ゝ物の体なゝ白いひる事なり。
ちなゝ。月ゝ雪ゝ物の体なゝ白いひる事なり。
ちなゝ。月ゝ雪ゝ物の体なゝ白いひる事なり。
ちなゝ。月ゝ雪ゝ物の体なゝ白いひる事なり。
ちなゝ。月ゝ雪ゝ物の体なゝ白いひる事なり。
ちなゝ。月ゝ雪ゝ物の体なゝ白いひる事なり。

うゑたるを喩しいふ。また用の白い

名月や花うつしとゝんてゝく　棉屯

名月や鶴のたぎつ元を子消

見ハ月を空ゆ垂てく其光りを喩しいふる用乃

白なり。秋色とも俳諧の本意ハ云はれてもし

いたゞく。俳も用も白ふ毒毒或ハ紫ふ新け

毒てく。之傍を白ふ俳るべきなり。其角が木母

寺ふ歌の今ありうるの月と吟ぜしも。只歌舎

の吟のうをいふてく。独てく人をしてくいうるも舎合

もるべき世良歌と思ふせうう。

雲ハ行く人を中ゝ也る月乃歌

名月や児ぶうち華ふ堂の縁

疫病のと人ふ乃ゝ行く月乃

名月や我世も更ゐいつゝまゝ

名月や我と筆架の図（ずがう）両

名月や池をめぐりて歌ひ人

悩乃ゝ乃ゝ花ゆり秋の月

良歌の白いゝ有ゝも大体はつゝまり。初白ハ

体むとなげく。体手ぬ程の月ふめうれざる紙
喩し。況るも表ハ見ぐちはなふ月を既でせ。
見ハ必ずたはく体なれど。裏の白い裏する方
よ貴家れ集ひのるを忘せこう。宗田白ハ
月ふ国く新しくなり。後の白ハ強くく紙
しく金く月を探せこう。れおのく体用
の心面をそぐしく傍を変ぐく月を喩せ紙方
とん。されを傍とるく白方を探るふ旅くを。
必その分のこん。古歌ホの傍を白をせく。金をを

探くるもるハりとようの事なのこう。稗の一二
ぬれをとくく。そを白れ金をふ叶をを。或ハをを稗
の書きの届うぐるをを。見ハ伺集の歌の裏。見
ハ被稗なぐく探りまり。後ハ他者のをを失
ふも必ずこん。

稲書や歌みのくゆく天徒の考

天徒ハ書をくく新光を表出る考なり。今傍て
稲書を喩しくを。富ハ光りれ度る場紙まう
け。考メハ書の義(らくぢく)の義異稗まくく白をハ収れり。掛紙

或人秘伝といふ句ハ秘伝ハ句ハ伊勢物語ハ
ごとく門の脇の俳諧なり。稲舟の光貞卿を
歌の雷なり。又信ちゝ生ハ中納言を指し。書
ハ即ち二條の后なりといふ。これいうるる方よりの
作ぞ。おそらくハ好ましき家の夢。

行秋や手紙認むるけふの栗れいが

別れや男ハなるぬのなれごゝを
初白ち秋のなごりあもられまぐなり。今ハ手
脇も去るうと歎しうるゝ。次ハ詩經なる秋

男悲春女愁とあるふるのひとせうたなり。句
元ハ此夕暮れ佳き海ようの事なりと
いふべきを。たちまち反覆しくさんが男なれ
ど泣うずと俗を。詩の悲しを今一段深登れ
ば。翁ぶ古詩古歌を取ハ必ずく出類なりた。句
をくるのやうすれば。古人の糟粕をなむるの
説をなのしさること必なきを。ねど既にた
うこの一家を言るふ所なく。いうでうさる卑劣乃志
のゝんなりくなる詩歌の人ふ。絳ハ古きを

暮ひ初しハ新しきを用ひんと形容するのゝ詞や。

落葉形見はてゝの庭中この形

形のなり沈のおもゝ深く深しかゝせる

際。程来縫のとゝろあるゝ必さる形をなるを

りのもゝるを。時前の彼ゝゝ形容もゝるなり

風や類さられいつゝむ人の姿

骨柴やそれとゝんゝゝゝ様の光

初白時前れ病ひと解ゝ例の花ゝゝゝゝ。ゝい

類されやゝのたゝみゝゝ姿ゝゝ。風の樹木ゝ

吟をさけぶ作きを喻しゝゝゝゝ異なゝ

ゝ。御の白人の色と出せるハ非なるべし。後世の

白ゝ門秋風の吹海ゝゝゝ人の色ゝゝゝハ秋紙

紙ゝゝむ人。その紙色ゝゝゝゝゝ。秋風

の考ゝゝゝ。其論ゝゝのゝ色ゝゝを喻ゝ

ゝるなりこがしし秋風ゝゝゝ虚象のゝゝ

ら。拘態形容するのけぢめおのづゝゝ新骨

べきなり。骨柴ハ白中七文字古迹迹を勧

めゝ感なり。

姿ゆ変れる所のなり変

変漢能変ずれ変ずれ変せふなり

物のなるる波辺のめづらしも。今八歩

うりて来ゐいづくふ鳴あくをふり変と

名づけて。今日八海物の鮮(たうとき)を変弱せるを論

しるべし。死辺なるく高人の振変せバ。

ゆるれとゆる慨言働うべ。さるるても振変と

なるといたづいたゆる泥実病なるく風流も亦ゆう

あらん。次のなる能うれ変も。海物と変を

る能変能ゆるせり

掛とうふ変のをりるせたるや

かけ変の変変なるや。元日変ふゆるるの年

の海りを変とべし。これ変の大分なるたるる

べし。さて風雅の花八かるる能をいふなるん。

変せばべ人も八変なるる海りの変もお

れるようで変る

年なるや海士れゆるれ伊勢変

これ様なる味ゆり

ゐもれ葉のかくれ水掬んあやめの蕾
はつゐもれ流るゝ水はなるゝむ
これはふ年忘の白なり。打碎きゝる体裁な
ぐ。白云の字略なるハ格の正きゝ後。後の
白浪ハ忘の字を喩しゝ
偽の舌ふ骨なゝ尼ゝひ
佛舌無骨の方便なるハ国ゝ篇ゞ新ゝ所ゝ。
今の世除疫の門芝もる木柴験者の。その
変なる呪文を彫ゝ。ゆそうた上篇の賣僧

ゐ迷ゝるなゝん。さゝゝ篇ゝ生世時麿ゝ元
孫のあゞぐ九宮十多弱。その去ゝべ面一ゝ流。
集中混ゝ去ゝ去後もまゝ新ゝ事
新ゝ。今ゝこれ句を拳ゝ只その去ゝ尼乃
帰する形式なるのゝ。
あゝ何ゝもなゝきのふハ色ゝ敏ゝ汁
針立や肩よ拵新庵ゝ
ゐゝゝ掛ゝ掛ゝ梅ゝ
時雨ゝやりぶ形ゝ新ゝ出用干
ゝ松の音

しられやすれば
恵をれんを
窮の者をしくるを
金厳の松の古をや
ふ年人も年をれ初しれ

○境界の部

犯ほうを一国を接くるを境界とする。
源出案つるハ源ねど。箱ゲ動静その
なれた。信濃敵ゆ只境界とふのこされど
條下の白地境界を定めるきへきあり
変白ゆりを世代桃書庵の書
蓮華ホ少を伊勢の初たより
ゆ一ツ瓢ハ加ゆを我分う那
初白変ゆりを庵中一冊もを紀を示ス。を世代

概言こゝみづゝ語者なる事を高等こゝ。
世人の迷言ふ蕾しゝるもの中の句れこゝ
ろゝ蓮華ゝいとゝるこゝ。松竹は栄えを祝し。
鶴亀ふ齢をかゝん。境界ものあゝねどこゝ迷
言の言ゝしこゝせんふるゝたゝふ仰く神風いせ
のたゝりはゝとゝるゝ。疫なる拘一ツハもるゝ
あの変句なる。世芸ゝゝゝ見ゝを示し
ゝゝゝゝ。これらの句境界を歌ゝせゝゝ。句
言ゝゝざゝを初べし。

似合しゝ新年瓢米ゝ升
かゝゝゝを富ゝ菜汁ゝ尾ゝし
初句似あゝゝゝゝ。ゝゝれど境界の句七十年
ゝゝ。集年分ゝゝゝ或ハ我ゝいゝる句ハ大抵
境界の句と初べし。

風雪ゝ拾ゝゝる正月ふ袖ゝきて

淮中ゝゝ姿ゝ似ゝゝゝけゝの言

世句たれの字ゝゝ人ゝゝゝゝべし。英彼境界ゝ
似言ゝゝゝ言ゝゝ。みづゝゝ歌ゝゝゝ。

道元禅師。越前吉田郡永平寺に住せられ。後深草院より帝衣紫のひろもを。綸旨
ありて賜はれども。生涯かぶらず。ふせしと也。其
偈に。永平雖山浅。勅命重重々。却被笑猿鶴。
紫衣一老翁。この偈のもろもろは紫衣をもとる和
尚なりと。洪山の鶴や猿が嘲り笑はんとす。
今の句暑ぶるし。

紀ふ〳〵我皮ふせんぬるふ涼
られ境界の孫のこゝろ。ぶもふ手拭ひ

ゐきを懐のもとるるなり

ゐとり鳥ゐくしろふ貫ぬ更衣
古ゐのもせ物ゐんの松はまつうしや
蓑衣いまぐ風をとりおろをを

二句ゐふ旅中の更衣。初句は一僕もゐきを
喩せり。次の句は中仏尼熊坂長範が名残の松
なるべん。句意は清ふいふ奥の遺こせの名なれば。
我葬衣の人目ふまづゝきを松ふうけたるも。
松の思ひんゐもやにゐきの古跡をなるべし

おもしろくこの句ハ世俗のそなれるきを歎しるべし。雪の既感が懷(ふどし)褌をとりしろく赤免俗とのひしゝ俳諧なり。

人は米を蒙ふるく
よの中ハ稲うるたやゝの庵

閉関祝

教うるやゝ蓋ハ稲刈るたの門の垣
本性をたゝ粧ふたゝ住るる
初句稲うるたの句。世界を万里の外ふ捨るる

情を示せり。教うるの句端出ふ也文句うるたゝまゝず境界ゝゝ明なり。

教うるふ家ハ兵ゝ食ふ男うる
教兵やられも又家友なるべ

此二句端出せり。初ハ其角が豪酒を戒めるゝ。後ハ酒ふ家し。教兵ハ平記を示せ。世賜蓋ふ其角蓋の戸ふ家ゝ夢食ふ蓋う形と郷しるべ。後の句られもその氏のゆまゝ。一方ふ為づゆゆ動静をもう吟したるるん。

素堂が新宮ふる年
君ゆくけよきゆゑ見せん雪九けい

一井亭

猿蓑より宿ハ師走の夕月夜
初白ハ雪をよきものと狂しゝゝ境界なり。
後の白ハ東西よ人海る師走のなふ。むとゝ
月を数ふハ。行りの多きを分れ泊りの多ゝ。境
界を其ん〳〵ゝゝ多のなり
笠もなき我を忘ぐる行ゝ

いうゑんしき寄や寒乃拯木笠
ゝゝをかゝもなゝてや雪ル柘尾む
初白我きぬ天道とふ初なゝゞゝ。狂しゝ拯む
ゝゝ俳諧ゝ。笠もなきハ境界ゝ。次ハ拯木笠
を風流物ゝゝ。ゝを分杜甫雪白ゝ分ふのゝ次
しゝゝ。風流を賣ゝりゝ法師よと世の識りを
省ゝゝゝ。後の白ゝゝ書ふ之秋を經て居ふ帰
ゝとゝゝ。ゝもかゝものの辞ゝ雲天境界を除。
雪九柘尾花ハ拯生の甲斐なきを喻せり。

深川八貧

米買ふ客の袋やなげ炬燵

られ貧らくの白なり。俳一ツのくるゝ境界を

喩せり。

年の市線香買年出たやな

年の市八重桜をいとなむ世の振ひなるべし。

仏一ツ小仏ふる家の茅の端を放下たるを喩せ

るなり。

月もしくはさきたりしに年の書

道人ふ重くて称もはりの多の書

初句の主ハ家ふ仄うなる風流を捨くられだ。

実の心ふかしこの横岡。貧家と禮き称。ふ

とも果しくるとなり。次て天の人を生育

せるを。ひるうちハ必食をせ。肩ゆるうちハ

かるくして寒をるるのるや。竹唐の貧しき

をとく。人ふかをめくれる称もはれど。又からら

ぬ多を立よとなり。世二句境界新出の分一

○端書の部

二月閉口彩色

大津絵の筆のすさびハ何佛

なれ　皇國の故実を示し。閉口ハ佛子を閉口

なり。敬て拘いたゆぬ事すくハなし。されバ

筆端書なくして自ら立さる事。境界乃

いたれるおもむき。

曲水亭

小沢の数のゑくるき年始ゆ

沢ゆるゞ必門人ゑる爲し。自ら小沢の接米す

くるくゝ清ぶゝ亭きふくるきう。新年のき

らもそゝくなるを狂ゝ歌ゑるゑんされど

沢自ら乳ひらかう。ゆゑる端出しゝ門人ゑるを喻

せるなゝん。

風麦亭

表ゑるくゝまぶゝ九日の祝ふ

ゑの自中拘るきハ金ゝ端出の自ゑるゝ。ゑろハ

陽表ハゑる拘るゝ。まぶゝ正月も九日ゑるゑ。祝ふ

の麦ハたゝ春風のなびくなり

清水流るる柳ハ芦毛の里子

あるゝ田の時ゝ流る泥水の

当戸部家の泥柳見せたるや

なゞ打くゝみの清ひ流るゝをふ

いつくゝ植るやと思ひしをなふ

泥柳の信ゝ立ようなびをつれを

田一枚うゝたちさる柳こゝる

春柳の泥ゝ植るゝ汐干うる

遥のゝ柳のゝハ西ゝ人の山家集ハ岩るにかゝる

地方ゆゝる爲ゝもゆゝ。こハ箱もよく知べき哉。

この端書ゆゝるハいぶかし。そハゝもゆゝ遠ゝ爲ゝ

ゝ。ゝ紀ゆゝも。一句の言を先ッ立て歌を英と

以。一句のゝゝろハ柳の風ハ吹遠。秀田のゝ麻

ゝるゝゝる。書ゝゝとしゝゝ田を植ゝる如くゝ

ゝ。又吹返ゝれ引のゝくをゝ乙女の田一枚植て立

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ喩しゝゝなり。次ハ汐干

の句なり。柳のゝゝふゝゝのゝ。

秋風や鳴瀧の庵を見ぬ

梅ふしきのふや霧を盗まれ

これ仏をのくゝのるじを林和靖ふ撰し。庵は清雅なるを喻せるゝ。白梅は実なれ紀霧紙ゆうけ出し。その実なれ紀紙又恩しゝく盗まれしとも。これ清雅の利はなり。

松をきく所より年を越して

これ人う荒芝ゝゝわまん花の表

これ自色の白なるべし。此句所長山と雪法

空子達磨と出合のゝをよめる歌伝れ説とし。のとさる出合ゆるべくゝものゝねぞ。以て仏ゝるゝ侍ゝ。なりゝ。説のぶゝゝなゝぶ。猶出を所長山とし。その白これ人ぞと仏ゝんは何のさゝゝあゝん。八十歳百歳の猶ひなぶゝ。文字のかを濁言とし。京を紀叱の新表人ゝゝの表を尽しゝる中ふ。羅荒きたるはゝゝ移ぶ。杜陀境異れ海ゝゝきを異ゆれおゝぞ江。此新表ゝれ人う荒きたる。荒芝ゝるハ家ひとゝと

歎しうふやのうたん。発句白ハ俳句まこと。裸
ゑくきてくぞまをとなるべき。

芋虎よ蓮の葉のうてはぐくきき

千演の宮ゝ出る出る

あけぼのや白魚しろき目一すゝ

られ曙の白なり。季節の白魚ハしろきと漢
けんとゝく。一すを形容ゝ。白きゝ目一すハあ者
ゝの紙さん。れ妙ゝを手際なり。

国正月彩白

をぐさまの紀の正月さゝやゝ者なのゝ下
壬正ゝ者葉の白なり。をぐさまの紀ハ源氏の冊子を
ゝり過ゝよりゝり過ゝゝる正月なるを喩ゝ。
られゝ者葉の巻のゝ千二冊ゝ者ゝ者ゝたゝりひ
ゝせゝり

遺世のゝ紀

雲と雁ぶり友ゝ中ゝの生別

ゝゝゝたゝゝぎハ白の体なゝ。格をなるゝ
ねゝ形のゝくなるを英とゝ。ゝ紙をゝるゝの

も又絶りゆきるを本紙たのもぬを夢とする
なり。

游道う陸奥こしを
第物まくしの花ん〳〵とも来る
去のもんこかの色好う信をうりせと示
せるなるこん。

水はるく世年を経て友手
麦ふ
いのちふりり井ふ生るる桜花

代こうろハもも彩こう為る咲。彩こハもの為
る生るる世でとなるなり
蕉代のみさうといひんハ宗祇
のもうる白ひく
蕉代実ちなかいるせん花の跡
去の白連と俳とのの茅を喻しなぐ巴く
月境界を合ちこう季節ハ蔓なくべし
菜つ已百亭る日ぬあく
合せせん藜の枝ふなるるはまぐ

麻の角まげ一ふしの別れ路

和泉亭

杜鵑ふれふる夜白のおりひかり

かきつばたかるる旅の心ゆき

初白ハ杖なるはまぐりて。亭名の百乃字を愉せり。麻の角の白。たゞ書をなび人事の別なるものはなし。和泉亭これ亭名ふ公なり。三河の玉八ッ橋ハ杜をきゆ示せり。立中ねハ洲ふ魚ふ。たるゝきぬる旅を

ぞおりのくよみ浮ひしふ。郭を杜のひなり

夜白れおりひ有のこゝろ。洲の白たゞうき

鶴中とふの道ぞられも洲浜の吐なるべし

甲斐の山中にて

行鈴の麦ふなぐさむやとり

洲白麦ハ山路のうきを旅。一杯れ交ぞ手

厨ふ切を。安鈴の道色の麦を一口浅食り

行もて愉せり。厨むゞ如くの心なるを省るる

格なり

蔦楓庵にて

さみだれや色紙屏風に蔦楓

洛白表を庵の名所のおのづから面白

りて。永きさみだれの濕気を除く。裏のふ

ろハ。洛白が金山の名うみられたる家に

の百首色紙を貼せ。ものしハ時雨の亭。今ハ

さみだれの蔦楓舎と第〳〵ふるまり。

をさなきものの紙光ひ〳〵人は

を移き人なたこん色も変常

洛茶ハ茶子なる事を云そせる花も一体

裁なり

風瀑亭を餞別に

高道ずびさよ行井山にてまぐ先

さつ雑の比人の行くまるれて

又誠むさよの中山さつ松意

初白さ弟二人の家に紙忘れぜ〳〵ぷ山ハ代

交の製ハ我を忘れど。命あ〳〵又誠さ来さ

なり。次の白さよの中山ハ又誠んのうけるなり。白の

らくらハ命ゆるさぬ又かゝる物狂ものゝ
ゝなるを。

寺ゐ寒く海ちゝ夜ゝ月ゝ

月ゝ見る度ふるくゝき夜ゝ長し

世ゝ自ゝ物ゝ一枝みをけゝね

彩色の小宿這入やみぞさゝね

初句ハ相応ゝ次ハ古ゝ新月ゝ猶ゝ初句ゝもゝ歌
ゝ言ふゝるひゝて味ゝ分ゝ猶ゝ一枝彩ゝ義入の格ゝ尚重
のみをゝ見ゝ行ゝ句ゝ新潟ゝ行ゝ彩色の句ゝ

髮背の絵の賛二句

稲妻や点の変ゝ落の様

いなづまや点の変ゝ落の様

南方孔雀賛

裸身ゝ押合ふものゝ月ゝ風

絵ゝ賛ハ不敷ゝ詠ゝ喩ゝ是常ゝ

之句体ゝ詠ゝ

嵐雪ゝ画ゝ

彩ゝ色ゝ中ゝ

蕪姿の句の賛

秋の月をうしろに見る法師

画賛

一霧もあらぬ蕭のうゝ

賛とは賞するなり。とかくとゝ。極むる物なり。たゝ
くるものなり。拾貞の句新相の句の義をもてゝ
さてさて重て上を賞し沈の蕪姿ハうの
法しを稀ゝ。也ハ響る月ハ濁るなきをゝんとする和
うゝとゝ。ふよりて。きゝと極めてるなり。蕭の

句ハ画なるゆ色こ屋さぬとゝふ辞りてたゞ行
ゝるなり

虫ゝいふ影ふ髪ふ

蛾 何と言ふ紙何となく秋の風

虫ハ極れる稀なる影を探ゝを髪を極せゝハ。
敬を事とする俳諧の一風なれバ。蛾とも虫
とゝん極めるハ俗名の一家特ゝ言べし。澤
人の虎を大虫と書しも我国れ万葉歌ゝ
ゝるゝ。されば風流の為ハかるたぐひもゆゝ

何ぞ撰だん

車庸亭

秋の秋と称し新宮城下なる鄙うな
車庸の熟字未詳。なりなる庸ハ考ふべし
するうち中庸なれむ。この由緒を叩く中を見
ちふとある事を聞よりつきこと日を尚ふべし。

東照宮御家人東照ハ授氏なり更
科の月の白を新月として考察
妙典の意ふ陽る事かなし附

絵を意とし

入月の絵ちく机の白陽この邪
入月をちく机の白陽を写ようけむるき
ゆうきを示せり

武義守泰時仁兎を先とし

改以去歌

名月の出るやあ十一ヶ條
おもしろと名月の秋や茶田山
初ハ六十ヶ条の白。後の白ハ茶田山の白なり

秋の日の色こそ殊なれ松の緑

旅行

あるじとする人の秋の風
さらぬ別れにあるものを
たちかへりまた来ん秋の色
箱根の関を越えぬ

初ハ秋来れば色なるべし。こゝろハ松ハつねなる色
なるべし。秋風の俗しきまハれぬとなり。旅にて
初めのこゝろハ日の色ハあらたまるべし。旅

色〻例まハしたる秋風を知らるゝなり。法師ハ
たゞ雑事を忘れ用ふるもなきこゝろ松乃如くに
すゞしくして清秋をむかふ。さて此の句ハ照
く新べし。賢者の句ハ此時こゝろ世雑事を
ハなれ。さて〻老が旅の風ハ世事を思ひ出
となり。終の句の重小僧ハ今の世ハ殊数寄の
こゝ清〻なりこれむかしハ世の物者にて人さ
善悪を思ひ知て思ひをめぐり。殊数高ハ只
こゝ資なりしとぞ。箱が関ハ秋を知らんの

雲ハ初雪の消安きをなんとこのひとりごと
も色即是空と觀ぜらるべし。もちめの
白ハ。法と遊子の留ふた食の蒐集をくうまく
寂るをなんとくれ吟るうとぞ。こゝろハかのう歌
世く帰る曉の夢」とよめる旅のおりひよせ
べし。されバ名を抱く經歷する業ハ。ゆられ
をなんとふこゝ。

ふ里の旅立途程をはこまゞ
聖ぐ。しをんて千鳥はなむ分うる

聖さ。しハ。る歌の死貴。かゝる歌おハ翁が性ゆ
の。ゆくゝゝ。

芦柏亭

秋ふゝき陣ゝ行をもるゝ人ぞ
られ秋色のゆゝや雲すべきなく。寒ふ枝をら
ゆゝく。蕊ゝ栖(すゝゝ)ゝる陣人ゝけく。
を。ゝ同ゝる白ゝ

桑名の本南ゝるゝく

冬牡丹ふ。ゝ浦の如ゝ。ゝ人

雲の後梅子咲る火桶哉

られそがるんの句。雲天の答意を謝しる
るるん。郭公ハおるんのうけるう。火桶の句古人
世紙ふと摺出ゆり。られいうるる友ゆ志ゝ也。
打りふ火桶ハ雲の接物なれど火のあるる紙
むと見えるる俳とるんされど雲ぞるんも
りと天地るゝ。のうゝきゝ雲ぞるんとる。雲
火をりりふる天狗の見名ゝそ。さるうゝるん元。
尾張雪川より宮ゝげ咲ゆ紙

沼料理可給ゆ

三十里尾張大根の噂ゝの那

えゝしげハ地名。雪川ハ氏なるべゝ。雲ゝ書の
さゝ雲ゝるゝおりゆ所あるる手紙なる紙摺
ゆ菊ゝれ句ゝ雲ゝ巻ゝ。式三十里ゝ
東海道尾張ゆ名る所九三十里なれど。箱根
来のゝ名産の沢ゝ雲ゝを彦ゆきぶりゝ
かるゝゝ時の吟ゝるん。大根ハ沢ゝるゝを序
とゝ。故ゆ三十里ゝるけゝ。

ゆゑ二年書籍しるす土大根
泄句も書籍をそなへくそ沢山なるを喻せる
なり

大聖持の金剛寺やどる
庭掃くや寺子ちる柳

佛言拂地有五勝利ことの後まよれるべし

猿人をそなへくそ
るをそなへくなるべし
新根こん人もるべしそなへの書

初句雲途のかちゆるきふ憎ぬ猿人の字本
たをけられるをなるを甚をそなへくなれむ
をなり。実ハ人をなるをそなへくなれむを例のちう作なる
せるそなへ。此句も山なるなるでらの句ハ深川の芭蕉
なるどみをて作るなるべし。

師走の海見んと松さ知く

海蒙く時の雪布のふ不

られをの海の句なるべし。海蒙て雪のふ不
時の雪とはハ時の句をとるべし。一体載く

きぐ〜まつやかぐ〜きしん十年

橘きんや茶を風の秋もきぐ〜ぞ

られ〜の秋集中みな〜。〜美秋みな作〜る

のくなり。句橘の程ふかくかつハ色なるきりの

必〜〜るきぐ〜ずべきなり。けれども一秋ものや茶ぞ

〜十年かくきしん〜茶のむものかなぐ橘

茶を風の今ぞ秋」と作〜バ。更ふ用流なり。いま

不求めくかく作〜〜〜。秋の字ハ麦秋或も

春去を秋なるの秋なり。

橘や妙なるきさ様の世捨酒

〜られ茶つを世をそ〜人と別するよりなく。

うの殺〜ふ渇のたぐひなんを。まこと橘なり

つ〜〜るなるべし。されバよりもく酒たの年

りとみるべき名ともいえど。橘きう〜ゆ〜る程

なるべし。

茶美ハ松風社里育月を秋

ゆく〜かく茶を美ハ宮のふるは

星橘の周紙はんまや明ふる

洲崎とは笠をさしたるやうに宮の傍なる日。星崎ハ國の秋
とゆゝしくべきをすぐに殺白くはけなるこゝ。
さて書の一体なり。白云ハ不白紙國秋の星
とせしこゝ。崎とのさてもハ松浦う鶴ふるゆく象
潟ハ振むう如しとゆるは振さく桃李こう華
を初しを。今は桃李をのみとなりひ宮なるも
時うへう。

○名所の部

右習ふべきこゝ

花さくこゝろ山ハ日光の彩ゆゝけ
洲多ハの字俗頼の枝ひさく雪生の頼なり。
雅云よいふハ白の花ふかゝびゝ。こゝハ古歌ハ常
不斷時減なこと字ひこゝ。さんや今花の古歌
なれたとなり。古のゝづひりこも常とべ
こと句なるふゝ。むべ一章中古歌の字なるハ

花王 春部

まゝ咲うぬ物のゆうや花王

洲崎常遠来寺師なるゆを翁なるなり

大日枝やしを引接一一寫
られ出こ山千空海師の墨跡たるもれ書乃
しゆるふよれるなるべしぞれば一寫ハかる
をぞこれ拙を撰者ふらるべし

寫ハ有るの當利くゝハ此浦人
のことをうや

當利うを賀茂仏也和歌の浦
貝寄をる風の玉ゆや和歌の浦
行春ハ和歌の浦まて過行くを

初句のゆ文字當利かゝをの公とぞ此をこさしし。
才二ハ貝合のかりひよりせるゝ。いづれもこゝろはし。
才三ハ陽春のことなきを色をりく。和歌乃浦
の絶景なるを喻せるゆゑ。句の表ハ春れ別れ
をなしゝ暮ゝ。潮くゝ和歌の浦まく過行くゝ
と相しゝ。さく裏の公ハ春れ別ふ風機を失ひられ
ど。今出浦ま来くゝ見れたをゝ。ゆるゝ春るも
接くゝ面ふしゝ和歌の浦を春しゝるゆゑ。
出例ゝ春ゝ波の人不二のゆかへ所ふて二月

七日八日うゑ」世句も不二を業とする句こ。表ハ
二月の七日八日也。冥冥なる比。ふじの山ふく拾ひし
とこそ也。裏のこゝろハ二月中比いとゝ冷きゆゑ七
八日かまくら。潮くゝ不二の林を毎日てらす也。
なり。ふじ山大形ゞ序うれど。強く人裏の義
の七日八日ゆゑを清ゝし。扨も大いなる合点
もこゝ。こゝろの強ゞするいち俳諧の名義なり。
俳士の御ハこゝを極こゝろの句加の幻術
なく業するもさも有なん。蕉翁一ツの名所、

幾度うゝ立ちくく極むるも。世吟ふ意人ゞこゝめの
章若なるまん。又翁ゞふじの句も義だくこの
俳りこゝろを。今集ふ人る孔僧ふ七八句そう句
ふ只一句ふ句ぞゞうへし。学ぶ其様ゆ年ぞん
く探ぐ。

いせまくく

神垣や思ひもうけぬ涅槃像

句意ハ此なり。神垣いつくハあれと伝聞世紀ゆ
仏法の恩を蒙こゝとゆるまく世大唐ふの吟

と定めるるべし

英法の屋猿橋

猿橋や時雨を居る笠の上

此句時雨猿とみ合せ居るまて橋乃
危きを愉しむ。

春風や一夢うつる二笠山

かゝる景色の地平面霧なのと極こるるさい
くふ於て死句とするの事

羽黒山中

羽黒山中

きうゝや雪を蓋とする岩

羽黒根

夏九月むかる物なし飯綱山

帝しさやわの山月の羽黒山

雲の峯幾つ崩れて月の山

初句い南岩の句まく季節八変なり。風紙蓋
らもとすべきなり。雪こ俗うるに一体載こ。中
の句この山の雪祈未詳。法邪うし雪るる
宮賢祈聖保食ノ祈なりさもるるん。白はうろ

を世ふりぶ餓死し霊となるにけれるなるべし。葵の月八月沢の月ゝ病おなどの多き時は云ひ寄ゝるなるん。才三八女の態りて山の名ゆいひふさぐり。海の白八宗れ切迷宮る山の名を見出しゝるなり。

白川ゝ

早苗ゆも我色恋死日数うる

これは苗の葉ゝ立ふ我張の日数を歎し。

劇る林そふゝ白川の冥ゝよりある能因紙號

べるなり

麦刈ゝ稲ゆ水ひんせる宮ゝ川

さみれを集めゝ苗ゆ宮ゝ川

涼しさや汐さきゝのゆゞみ川

初白八只布歌をふゝけぶんせゝゆる麦

林のまぶれよりゆる白なるん。沼二白八陸奥一

面を只一筋ゝゝ出ゝる大河なる紙さゝせり

けさ菊ゝ甲斐の嶺ゆや田ゝ浦

浦ゝ八出べゝ川ゆの門をゝすゝ。浦八ふゞ川の

おもしろく感ずるを喩しなり

さらぬれの雲吹嵐せ大江川

る士をもとしさ月の大江川

初句端出ル法あしく清田の宿本道と

なり。句意いかゞまてもいふべく。大

河なるを嵐せり。次も考ぶふる波つまかうの

ねふさ月の今ハ日けゝ誠しくすく。大河を

ゝ紙喩せり。

さらの中山りすく

いのちなりもつふ笠れ下関係

本歌の雅を殺しく俗俗ふ活すいたるのい

の例なり世いのちハ其人のこゝろなり

誠の中山

中山や誠ゆも月も又命

これ誠ゆ其人の吟なるべし世いのち雅を

なり

雲白しいゝ白ゝ保の名なれや

世ゝ保ハ松ゝを指さ仏ゝ名洲ゝ名ゆゝて名

こハ松の源流水の泥しく足ふまぬ福ぞ。今我
足時と秀句ふうけうの。松の字をのらしうこ
例の俳諧。

武蔵野や一すゐの麻の香
麻ハ毛物中れ出声なるまて白玄はなり
第拍の関城
目耳かるる時や蛙文さ月不二
けものの子ら。さうこれの宮ふうこ歌ふ。
あのこ法ものなるまうハ部こ見やさうこ出

なり不二ハ山ハ重ねこ名養生双ま立重ねこまむ
を出なる
関城るハ高ねこ山みな
雲不隠れこ
雪時ハ不二を見ぬ日ぞ面白
雲ぞれ不見隠せぬ山ぞ。なるに。一雲
なるこ山ハ部こ名中の物せこ不厭こ。毒乃
中不絶こさこ法のこせぶのこ。なり。
崑崙ハ芋こ蓮葉穿丈ハ神仙

の地なり。眼のはるかに士峯を地
を接して蒼天をさして日月の光を
奪ふを見るがごとくにして白の変みな
表すべしこれ第千変也。詩
人の白を織さぬ。戈士文人白云
紫をなり。画工も筆を捨て言る。
第彼姑射の山乃神人なるべしを
乃せむ。その絃をよくせん。
実に奇れ言ふべく百景を表り

言ふべくしてふ消えかねこの梅ぞ春のしるべ
完本なり。百象八大山なるものを除せり。第いま
ぞ第二をもんざれるも。此白ふ除く云ひ半ばを
色をもらしてもむらくふ場を花を。白八ぬ者
うなり
不二乃すがたを雲ゞ菜田の霞ひ
られ白象八的なるべう。雲来考。稱ふくふ他者の名
を。雅号の霞なれど他の名家もあるべきなり。
人名を雲一字なるべしふ者ふ。

月清く林を入日の跡の不二

凡不二の称は至高なるを以て仰るられ常なり。

鞍沖のぐうれ分よ〳〵あんつちれ船のうちなる

谷蓮は不二の雪根の雪ふを有るる」とかり。蓮

白のうろこは月きえ日入て後は天地間ふ物色。

只浩々切〻なる秋天の不二のみとなり。其間ごう

月の白ふへ不二ふ入月を宗鑑やうふの月」

不二の雪根よかられ新年也

これ雪の白く。根は雪清ふ又雪。

抑此御道を通る人百人は百人めうれど不二を

りく〻ゆそぶ。これは白のこゝろは或は墨絵まるさ

げれ或は雪の林まるづ也。お歩十歩ふ限見へ

く。ちぐ白なく見紙舞うんとなり

雪面の空ふ芙蓉れ天地

芙蓉は蓮まく〻不二山の美名なり。白雪雪

雪ゝ漸〻山の半腹まく。雪は大空ふ好け也。

田舎の山は歌ひ〻るを除せり。

一尾峯は附る面の雪や不二の雪

（近つくいふ白芙蓉は俗ふ中の白空をとり
ゆく〻は芙蓉花のあく）

はせを庵ハ宮ゝ葉ゝの蔵ゝ係ゝ尾を曳きゝる
山なれど。一方ハ時雨保ゝ。一方ハ宮ゝ。
一山面ふはせを両物ゆゝるをゝく大形俗せゝ。の
阿房宮ゝ大殿なるを論さんとて。一宮之間両
気候不齊と俳せるなるゝ。

松高や五ゝ〻ふ梓ゝ夜の海
ますゝゝのや蔓を衣裳ゝ月とゝ
松高や五ゝ〻夜裳に夜の月
ゆゝゝ俳や宮ゝ高のきぬくだり

九世の教学人倫境ふ乱ゝ枕するや。十日廿日
或ハ二月ゝ月。倫句ゝ言ゝ。時をかゝゝ又
玉ゝ。倫句ゝあゝ止む。又ゝゝひ乱ゝさるハ。
魚を切ゝ釜ゝ接るのいきれゝ。箱ふ松俗の白
ゝゝといふ説ハいふぞや。俗ゝの俳記をかな
らゝ藉廣物なゝん。さて箱ゝ赤ゝ氏也まて
とゝん也。

松高ゝ笑ふゝゝ象潟ゝ
服ゝゝゝゝ

を加へて地勢詞をなすべきに
よ似たり

象潟の雨や西施が合歓の花

この句象潟と西施が美しく。雨と眠を對せり。
一本に象潟や雨に西施と出るなり。西施は眠をも
うせうるに象潟は雨なるゆゑ故なり。然るに
雨も眠も西施のうつくしさをかたどる。象潟を
晴色一方とするは喩しの義なり。且奥の
細道の文も出所況は雨あり。まして東坡この西

湖の詩をうけ出せるなとしれんも。西湖雨亦奇と
西施淡濃粧とみえたれども。そはともかく元は
書は語をこそ。只西施を以て象潟を喩し
うる所なんなるべし。

いざよひもまぢかし文科の郡うち

去の比八月の名月一とせ。義は文科百里の
道程なりとて。中秋の夫を載て行べし。是月代
待とする句なれば。代句は月の字を含べきなる
なるべし。文科八不去の義なるべしとも秀逸。

蕎麦は雉子を雉子とも花ともいはぬ本意

行ふもぐ蕎麦を見ちらしぬ本意

うれそめの山なるを喻せる

吹花を石に濁りの山なるを喻せる。梯の石

うれ濁りのやけの山なるを喻せる。梯の石

雉子なるも雉子小児もらはぬ句。

風の濁りを山の名ようけたる。

秋風や義も富を不破関

秋むしやり月見に旅の時をなれ

玉〳〵や八重さくふ秋の月

あり〳〵

石山の石ようこし秋の風

初句不破の関に秋紙序とするこゝ。次句

むつに誠芭の濁生津まくの吟とそ。雉子

あらべし。句意ちいつ迷まくるものゆゑ。

此句は消なり。さてその句加賀の那谷寺に

三井寺に秋風亭紙うつしうるを蕉翁の吟く。

さゝれる隠生ぬるのや秋田の稲

名月の姉川有ても瀬田の橋

初句も拍子のやの字上文字みるれやとすれバ六月有の句也。今や字を捨て味つけるぐ遣の深くなるを捉へ橋の字丈なるを論せ有なり。次も名家の句なり。季良夜の句か。瀬田絶橋なれど志つかるん。句中拍子ハ貫家なるべしとし。

六月やミねに雲おく嵐山

功成名遂而退

山の名をゆく菱ををこそ桜なれ

初句ハ六月なれども次拂はぢと嵐を除くなく。次の句こゝろハ桜也は有てなし山なり

八瀬まで

竈風呂や梅も桜も君ヶ草

これ秋の句なり。やせハ薪の産地なり

清瀧の浪に涼むや夜の月

清瀧や浪に散こむ青松葉

初白波の月を詠ふハ岩のゆなれた場の白と
ぞ聞なり。後の白とハ其の樹の赤だしく。
蔦ふハすづく立く。今黄葉の紅を蔦らせ。
反しく赤葉をきうせる一体裁く

枯立ッや伊勢の山社松半

伊勢ハ生勢く。枯るゆく生るをきうせる
ゆく。これもあふおすぐ体裁なり

八朔や夫の橋立たそねれ

この此系由方より松系中合ひ。中ハ切レ変の

文殊豊ゆく。宝も布殆んどたぞのれしの
如し。八朔ゆく枯を呼出し。翁しれ程を
結手豊ぞべきなり。

蔦城ゆく

なほ見ゆく新るゆ神の臭

これ神ハ一ぞを名べし。さて名西れ冷ゆく
ぞくゆるも。大体ゆうゆきの名くべかるべく。
只ぞ腐をゆくぐのこの俗紙出並んも。句を清
移ぶる益なきハ省きぬ。これハ歌の名所を撰

集る俳諧おのづからかぎりあり其かはり志
うしぶ

面のはや世間はなれを嘆町

これ東武戯場の地。そもそもこれはやく古く。
人の知るもまこと唐しこ。元禄内芝小屋出る
りの。浪の浦原。大坂の小演。名をりく通せる而
おりひを逝うふはしゆく。などゝ浪物の数多ら
さらん。やもりくふれく。を扱ひ物しうしぶを。
中くを知きふもゆうなん

十六日の夜ときれられぞ海すう
れ小貝拾ちんとゝく種の演る
赤を色らひ海上七里
さひ〳〵さや浪ふうちる演の秋
これ浪を滝〳〵き信る立ゝく渝せる
秋や演ふ中やや秋〳〵麦日和
月をあれと蔦を紅ゆうこ浪の夜
月見ものたうきやや浪の秋
ひうゝさる音さる浪の波ちゝを

又後せを稲むれハ人を迎バ法師の秋

初句の云ハ時節ハ秋、きやハ秋ハ法師の如くう。

色ハ此ゝるの秋しきやハ秋のごとくの。今

麦の秋ぶかく秋しられぬ。清ゝの秋の秋し

さ思ひしるゝなり。法ハ蓮ハ月の涼しきを驚ふ

時なぐ。雨ぐゝ。雨ぐゝ。それさくを無生人の

ゝく。二句めハ雑ゝぐやゝかゝれり。四句めハ別涼

の冷ゝ。ひぐるゝに古地の清涼きを思ふ也。

宿りふ高くを秋ふけたり。新く寒しくて

後。猶ゝ果の句ハ物ゝるゝん。法句ふつけく

一笑語あり。此年一行御人来ゝく世ゝの風流

を語ゝるゝ。宗匠の俳ゝも時あつく句ゝ出

ぬもあるゝ。異別の云ゝ詳ゝく十雪年と中

秋の月ゝ秋ぐゝ。ゝを席の二三人句を吐て懐紙

ゝ載ゝ。独筆宗匠の句を清ゝ。名月やゝ

吐ゝ法ゝいゝ。ゝ句ゝ。ゝるゝも化ゝ雪ゝ七句紙

載ゝ。独筆又清ゝ。名月やゝ吐て、

又止む。一巡ゝでふみ迎ゝも宗匠、ゝ御句

なるき夜又清つゝ。字通へ名月やと注す。こゝ
合せて一名月や名月やとなれり。
形御中かゝる事もなきことかなる。式部卿か
の白ハ宗通のふゝ立ある白なるをもてゝ
でかなるき。洗句に名月やと歎じゝるなく
こゝ夜の月たゝふる物なく。清明なるのハ。
雖人の後よみてを。されど今ハ人の白もい
と鮮ゝ。ゆるべきふ。人の鮮しきハ世人乃
為ゝ初る事なれど。そのゝよハ文ふ多ゝつ

けぬるゝさしゝさハ十分むうふる春ゝう。
作載ハ世格ゝ為きもこゝ格るをるゝ所。
されど世格てふ物為の世人の心ハ作をも
つゝんる。さればもいてるる如く。手ふ取て学ぶべき
作なるき夜なるや。いつゝう学ぶもゆるゝかの形
御人の如く部ゝ化の格ゆるをいぶうゝ。かの通
を正風るゝといふ。これ節を羽織の下ふなゝ。
人ふ向ふゝ。世羽織ゝ
ふたゝゝ。ゝ人羽織なるゝふ毎せざるゝ

如く。世の識者いうぞう俗俗の心義を知る
んや。上箱が句を論ずる。花きを知る方
器を蓋ふが如くなれば。弟ハ平生学ふ
く。徒ら伝ふるのみ。又おのれが俗句を論るも。人の
問ふ事その要を惑ふのあらんされハ俗語の
義ふ論く格を立るハ学ひの為のみなり。世
と平ならんるを形ふが為なり。今格俗を
拒く俗語の句ハ格なおち理ふ言ひ表れと。
別ての段ハ格語を句れ門さ者。文者を

喩ふ義言ふ人の公ふ為〜安く自句乃
面白に於るも人ふ俗く決するの義なるの
べし。されど格を俗ふ。古人の句より撰る
火ふ所行を云ふ。貪瞋癡之毒の
猛火なり。句ふ云ふハ貪仏の切滅ハ撰る火く
所をうけ〜消ふが如く撰ハ云るとの
うのなるべきよさハ俗〜ば。俗ふ火ふ所をうけ。さ
て意仏〜るさるふ俗〜〜ふ。するおち格を
隔〜〜ふ。和歌の俗語の句皆式体載〜。

形ての後のなげき事ふ除くを義ふうくゑ七
ゑの辭のくいひ遠くるゆ能たぐるのゆらば。
故事古歌の傳をたゆみ。或ハ書を引く喻を
べきく。皆くを傳をいきんよ。むう一度れ莊
子といふ人。物化の死を人ふ曉さんとするふたく
ちふ解き曉すべきを限なく。切嫉の愛りく
發せるを。今その物化の論をたとへんよゆる實に
利富といふ者ゆり。一日所用ゆて蘇墨へ行る
ば。道のかくそくなる丘よ。老人二人ゆとかるけよ

泣居くを。利富立寄りくゆ細を問へバいそく
ゆれくいとかなるきく事ゆり。今齡すくに六十
ゆるをうく人生かぐりゆ迫ぢ。ゆく死去ん八必定
なりうされだ別深ふう死式世界を去ゆ。更ゆ別
深なきくゆの世界へゆくるゆよくだゆらく
かるくとく。又さゆくなく。利富ゆ此ゆくおゆ
系れりふ所と大ふ異ちゆ。君達八今死して別深
なき世界へゆくとするう。我ら別深ふのくゆく
ゆの世界を去うく。今世別深なき世界へ來住む

とたのもうす。二人うい〳〵敷ハ此の世界紙
表とし。此世界を裡なりとするゝ。此世界を表
なるゝ此の世界ハ裡なり。初の如く互ひにうら表
を乗ふ〳〵やるべ。利富をもとめようたりふるやや
ゆりきん。此二人は別なるゝとそ。さて風ていき。鉞后
世ハ海と云ふ。今ハ鉞后の風もいやとうふ云れ
ぬ。二人の恋人ぢ〳〵られをこゝ。忽ち物化乃理
をさとり。海を掃ひ〳〵ゆきとそ。此風ハもと
鉞后の玉三玉れ星れ拾ふ。初風ぐうふひ初め〳〵

とそ此初風ちぢめハ鉞后の玉彩浮の浦かゆり
ゝ。金鱗の狂ふ〳〵りしゞ。ゆ恋ゝ〳〵三玉〳〵りり
さる。ふれを別深の法ふ云れも〳〵別法を
み。七日ゞ百姫を玉ゝ海を砂しふ。初風を
ゆゝ〳〵の別法ゝ国もふれんもゝえて。ゆ〳〵
糸ふたゝけられ〳〵三玉〳〵ぞうりをる。み免
うゝちはゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ。なゝけも
ゝ姫うゝゝれた。年の寿ども色ず〳〵。又
此星ふ別深の恋ゆゝ〳〵ゝ。ふれを云る

りの八日くみうとく。近津くるめ八日。新しむ。
られ人情の事なれだ。いりしう誠后の事を
ゝとせれ果てくかの胡蝶をうゝひうゝとぞ。胡蝶形の
物しく。ぞるみうこて近津くふ化りて。浮るを
物をゝとせれ。せれかそうたるゆうふるる。物化
ゝいるるう。荘子道理をくる曉さんとて。我
夢を小球とおもて花る物ふ。を府の公球のを
みるう。られりと荘子るる事ハ文ふ高くざう
しゝいを。られ物球をゝかの物化の理

曉せるハするをもち俳諧をれだ。毎も物化成
喻さんとて
りうちし仕俳諧こそん花こそふ

俳諧一串抄終

永代

寛政八年 市川□ 一市川八百蔵

[illegible]

下 声曲 雑上 十枚[illegible]

上 市川広[illegible] 市川広五郎

一枚[illegible] 東屋[illegible]

[illegible]上[illegible] [illegible]